

作者は誰か?ゲーテか?
あるいはレンツか?ゼーゼンハイマー・リート論争に
ついて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊池, 良生 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4957

作者は誰か？

ゲートか？ あるいはレントツか？

ゼーゼンハイマー・リート論争について

菊池良生

人が死ぬと掃星が流れるという。すると、その男が路傍に命を捨てたその日の夜空にも掃星が一つ流れて落ちたのだろうか。だとすると、男は恐らく、ほほえみつつ、星の終末を見、臉を閉じたことだろう。それが、この男にはいかにも相応しい。しかし、哀れな行き倒れだ、天が態々、焰を放ちその死を告げ知らせるだろうか。いずれにせよ、その日、彗星が現われたかどうかは、手許の資料では確かめられないでいる。シーザーの死後、七夜、巨大な彗星が見えたという類の話ではない。男、ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レントツの行き倒れ屍体が発見されたのは一七九二年六月四日、早暁、モスクワのとある街角でのことである。その気になれば確かめることができるかも知れない。しかし、ここでは、あえてそのままにしておきたい気がする。因みに、手許の理科年表によれば、一九三二―一九六〇年、三十年間における、モスクワの六月の平均気温は十一・九度。十八世紀のヨーロッパは寒冷期にあたっていたから、その日はもっと寒かったかも知れない。それにしても、零下二十度、三十度という酷寒からは程遠い。レントツは凍死したというわけではなさそうだ。ところでレントツがこんな形で死を迎えたのは、様々な要因が輻湊したう、えでのことだろう。しかし、一口で言えといえばこうだ。豹の如

く、季節ごとに己の斑紋を美しく一変させる力をついぞ持ち得なかったがゆえの行き倒れ。こんなレンツの死に、せめて、凶々しい星一つ、手向けに供えてやるのも悪くはない。

勿論、彗星に殊更、こだわるには理由がある。

「レンツは夜空をさっと流れ行く彗星のようにドイツ文学の地平線にほんの東の間、姿を現わし、この世に一つの痕跡もとどめずに突然消えうせてしまった」というゲーテの言に魅かれてのことである。魅かれたといっても、一人の生涯をかくも涼しげに、かつピタリと言い当てるといふ恐しい表現力に強い反発を覚えてのことだ。木で鼻をくくるといふのはこういうことかと思ひました。

それはともかく、この言は、言うまでもなく「詩と真実」第十四章に見られるもので、この章にゲーテのレンツ観が集約されている。

ゲーテのレンツ観とはすなわち、ドイツ文学史のレンツ観なのかと言いたくなるほど後世の評家、とりわけ十九世紀の評家はこぞってここに拠り所を求めている。レンツ受容の受難史はここに始まる。曰く、レンツ？ゲーテの言葉を引用すればそれで充分だろう。曰く、ゲーテの言は、ドイツ文学史上に遺る、不朽の名弔辞、レンツもって真すべし、諸家よ、これに對抗し、レンツを救おうなどと夢思うなかれ、それは鳥済の沙汰というものだ。全く散々なものである。アンチゲーテ派は極めて少ない。その数少ない評家のレンツ擁護も、型通り、事実認定の争いに終始している。曰く、ゲーテはレンツ評伝のなかで、レンツを個人的に嫌悪する余り、幾つかの事実を歪曲して伝えている。真相は是々である。ゲーテによる「詩と真実」第十四章のレンツ評伝をあっさり無視し、レンツを原点に戻って、彼自身の作品から評価しようという姿勢は見られない。つまりこれら評家の評言も、符号は逆になっているが、根底では、先に引いたゲーテ派の評言同様にゲーテに縛られたままであるというわけだ（この項、エヴァ・マリア・インバール「ゲーテのレンツポートレート」参照）。

しかし、本稿はこの辺のことについて説をなすものではない。いまま少しゲーテに縛られていたい。つまり、いまま少し、ゲーテの言にこだわってみたい。

そこで繰り返しておきたいのは、ゲーテのレンツ評伝はなんとぬくもりのない、それなのだろうという私の個人的感想である。断っておくが、ここで、この評伝はゲーテのレンツに対する個人的嫌悪感に裏打ちされたものだと言挙げする気は毛頭ない。ゲーテがレンツから蒙った多大な迷惑、恥辱のことを考えれば、評伝の内容はむしろ大変抑制の利いたものと言えるだろう。

ゲーテがレンツと知りあったのは彼のシュトラースブルク時代のことである。この出会いは二人にとって相識というものであった。二人は、ヨハン・ダニエル・ザルツマンを中心にした当地での文学サークルで互いにそのまぶしいばかりの才能のきらめきに畏怖し、共にシュトルム・ウント・ドラング時代を生きた。それはやがて遠く過ぎる、青春の一齣であった。少なくとも、季節ごとに己の斑紋を一際、美しく一変させる術を心得ていたゲーテにはそうだった。

ところでレンツは、故郷リフ란トの貴族の子弟、クライスト兄弟のいわゆるグランドツアーにおける教育掛としてシュトラースブルクにやってきたわけだが、ゲーテは、レンツを教育掛に選ぶということがそもそも理解に苦しむことだと書いているが、まさしくその通りだろう。更にゲーテは、兄男爵、フリードリッヒ・ゲオルク・クライストが、当地で得た恋人を残し、しばらく故郷に帰った折り、この娘に悪い虫がつかぬよう不在の友のためにその恋人を守ろうと自ら偽の恋人役を買って出て、結局、娘の遊びと楽しみの具となり困りから失笑を買ったというレンツの迷騎士ぶりも活写している。あるいは、自著「ゲッツ、・フォン・ベルリンゲン」の出版後、直ぐにレンツが「私たちの結婚」という風変わりな題をもつ論稿を自分に送りつけ、そのなかでレンツは、やれ自分とお前（IIゲーテ）の才能は同等のものである、やれ自分の才能が上であると書いているということも報告している。またあるいは、自分は、レンツの論稿や作品の出版を世話してあげたのに、レ

レンツはこともあろうに「私を空想上の憎悪の主たる対象にしたてあげ、奇怪な気まぐれな迫害の目標に選んでいた」とも書いている。この辺の叙述はゲーテの怒りを通して、レンツの姿が彷彿とされ、むしろ私の好きなところだ。

ところでゲーテは学位取得後、一七七一年八月、恋人、フリーデリケ・ブリオンと別れ、つまりは捨てて、シュトラースブルクを去っている。つまり、ゲーテとレンツが互いに火花を散らしあつた青春の一齣とはわずか十週間足らずのことだったということになる。その後、ゲーテとレンツの関係はどうなったか。ゲーテのレンツ評伝にはこれについては一切書かれていないが、伝えられるところを粗略すると次のようになる。

ゲーテはその後、スイス旅行よりの帰途、一時、シュトラースブルクを再訪するが、それはごく短期間のことで、別にとりたたえて言うこともない。やがてゲーテはワイマール公国のカール・アウグスト公の知遇を得て、詩神の宮居、ドイツのアテネと謳われたワイマールに移り住み、いわゆるワイマール時代を迎える。一方、レンツはシュトラースブルクでその後クライスト兄弟の教育掛も外され赤貧洗うが如き生活を強いられ、フリーデリケに対する恋心も実らず、身も心もボロボロという状態に陥る。そこでレンツはゲーテのいるワイマールに活路を見い出さんとする。ゲーテの伝手を頼りに、自分の文学的才能と、熟知しているものと独り決めている軍事知識（なにしろ、自分は「兵士たち」を書く程の軍事通である）でもって、ワイマール宮廷に迎えられることを夢見る。ところが、この夢を果すには一つの障害がある。レンツはそのためにも節を枉げもする。シュトラースブルク時代、レンツはゲーテと共にヴィーラントを糞味噌にやつつけている。ところが、そのヴィーラントがいまやワイマール宮廷で重きをなしているのだ。そこでレンツは彼を揶揄した喜劇「雲」の出版を見あわせるといふ形でヴィーラントに詫びを入れもする。ゲーテも昔の誼でレンツを公やシュタイン婦人に紹介の労をとる。こうしてレンツはワイマール宮廷に迎えられ、最初はいい線いっていたようだ。シュタイン婦人も最初はこの一風変わった男を珍重し、歓迎し一時は、ゲーテ以上に親しく交際する。しかし、初期の歓迎熱も冷め密月期間も過ぎると宮廷は宮廷らしく、

レントツを迎え入れるのに様々な手続を課してくる。ところがレントツは甲子園で大活躍し、鳴り物入りで入団した球児がいきなり開幕戦で先発完投できるものと思ひ込んでいたところがある。なかなか檜舞台へのお呼びがかかってこない。軍事顧問の口もかからない。宮廷生活で身につけねばならない立居振舞も煩しいだけだ。なによりもゲーテは昔のゲーテならずという人事の摂理がレントツには理解できない。否、その摂理をまざまざと見せつけられるがゆえに、かえってレントツは、今や立場を異にするゲーテに慣れ過ぎた振舞に及ぶ。レントツの心理の亀裂はいよいよ深い。焦りは奇矯な行動を産む。その度重なる不行跡に紹介者ゲーテは何度も煮湯を飲まされる羽目になる。一時、冷却期間にと、レントツはワイマールを離れるが、屈託は収まらない。舞い戻ってきたとき、その奇矯な行動は凄みを増すばかりだ。

一七七六年十月二十六日、ゲーテは「レントツの愚行」と記す。ついに勘忍袋の緒が切れた。「愚行」が何を指しているかはわからない。ともかくゲーテが深く傷ついたことだけは確かだ。一説によると、レントツがゲーテとシュタイン婦人との関係を揶揄した戯詩を送りつけてきたためとのことである。ともかく、事ここに至って、ゲーテはアウグスト公に働きかけレントツのワイマール永久追放を画策する。一七七六年十二月一日、こうしてレントツはワイマールを永遠に去らねばならなくなる。そしてその一年後、レントツは精神を冒される。その知せはワイマールにも届くが、そのことをゲーテに告げようとしたものは誰もいなかったということだ（この項、クルト・ホーホフ「J・M・R・レントツ」参照）。

このような背景があれば、ゲーテのレントツ評伝も筆鋒鋭くなったとしても不思議ではない。ところが先にも書いたように表現はなんとも大人しいものだ。ゲーテは人に恥辱を受けても行い澄まして平然としているような男ではない筈だ。例えば「若きウェルテルの喜び」を書いたフリードリッヒ・ニコライに対する返札などは相当なものだ。「ファウスト」のなかのニコライ戯詩は品位も何もなく、えげつないの一言に尽きる。あくどい論争家というゲーテの一面が浮き彫りにされている。

ところでワイマール以後、レンツとゲーテは、二度と相交わることなくそれぞれの生涯を終えている。シュートラーズブルクで互いに映発しあつた二人の新進気鋭の詩人のその後の軌跡は、片や哀れな行き倒れ、片やドイツ文学の宗匠に登りつめるというけざやかすぎる対称をなすことになる。これを仮に、一榮一落是春秋の語るところと言つたら身も蓋もないだろう。このような膠もない表現は、描かれる事実からは努めて距離を置くことをたしなみとする歴史家にこそ相応しかろう。

ところがゲーテの筆致はまさしく春秋の筆法を借りたかと思える程、至極冷静である。膠もない。青春の一齣を懐しみ、いつしくむような所は一切見られない。しかし、それが結局、功を奏すのだ。「詩と真実」という自伝の場で怒りにまかせレンツを槍玉に挙げていれば、人はそこにゲーテの大人気なさを見、ゲーテ、レンツの評価も微妙に変化するところだろう。筆致がこのうえなく冷静だからこそ例えば「(彼 \parallel レンツ)」の才能は真の深みから尽きることのない創作意欲から生まれてくる。この才能の内部で、繊細さと、躍動感と鋭敏さが互いに競い合っていた。しかし彼の才能はきわめて素晴らしいものであるにもかかわらず病的なものだった。このような才能こそは評価することがもつとも困難なものである」といった言に人は一も二もなく納得するのである。この辺がゲーテの凄いとところで、レンツはとても敵わない。

さて、ゲーテは「詩と真実」第十一章でシュートラーズブルク時代のシェークスピア崇拜熱におけるレンツの役割とその人となりを手短に紹介し、第十四章で本格的にレンツを語っている。そしてゲーテはこのレンツ評伝を、当時、ゲーテ自身も全身染めあげられていた筈の時代風潮から説き起している。時代風潮とは、自分および他人に対する道徳的要求だけは峻厳で、そのくせ、実際の行動は怠慢至極といった中途半端な態度から生じる「奇怪な習慣や悪習」、「悩み」、「自己の内面の埋没」に染まった自虐癖と規定されている。ゲーテによればこの時代病を最も色濃く体现し、いっまでもそこから脱け切れずにいたのがレンツだということになる。ゲーテはかつて自らも熱中した逸楽と放恣の理念を否定する。否定し、否定したところにレンツがいたというわけである。ここではレンツの個人「全体」が描かれているのではない。ゲーテは「個人

的なもののなかに時代的なものを括りだし、今度は逆に時代的なもののなかに個人的なものを観つめようとしたのである。個人はある時代の代表者として典型的に描かれ、そこに時代像が凝縮され、個人のなかに具体化され、逸話のなかに諧虐的な形を取り、詩的形象となっていくわけである」(E・レインバール前掲書より)。これこそがまさしく「詩と真実」全篇を貫く筆法である。ゲーテは季節ごとに己の斑紋を美しく一変させるが、そのたびに獲ち得てきた自己省察、思想に従って過去をみつめ Lentz 評伝を書いているのである。そしてそのなかに描かれた昔の友や論敵との触れ合いは「いまなお続く、自分自身との対峙の一つとなり、自分自身の成長の歴史となり、自分の本質を常に新たな視座から捉えようとする際によすがとなっている」(同上)のである。何度もうが、これでは Lentz は敵わない。自伝を書けるまで生きた、とはすなはち、自分の成長の歴史を回顧する年齢にまで永らえた者の強みだ、当方、些か生き急ぎ過ぎたと、せめてもの皮肉を飛ばすのが関の山だろう。

ところで、この評伝が書かれる三十六年前一七七七年一月三日、Lentz のワイマール到着直後、Vierlant はメルツクに宛てて Lentz について次のように書いている。

「Lentz は不規則的人物で、子供のように善良で、敬虔であるかと思えば、非道い悪さもする。そのため彼は時々、実際以上に邪悪な奴だ思われもする。ところが Lentz 自らそのことを楽しんでるふしがある。彼はイマジネーションを多くもっているが理性というものが全く欠けている。色々と切望するが産出する力がない。いつも何かが始まり効果を及ぼすことを願っているが、それが一体、何であるかを知らない子供のようには時々、笑いをひきおこす。しかし、それは悪意があつてのことではなく、他になすことを知らないからである」。これはまさしく現場からの報告である。Lentz の人となり活写されている。ここにいるのは Lentz 個人「全体」だけである。Lentz 個人から受けた鮮烈な個人的印象が語られるだけで、その Lentz を取り巻く時代背景の考察は一切見られない。しかし、それだけにこの Vierlant の現場からの報告はゲーテ

のレンツ評伝と多くの点を共有しながら、はるかにぬくもりのあるものとなっている。少なくとも私は好きな文章である。序ついでに言うと、ゲーテは現在の視点から、逸楽と放恣をほしいままにしたある過去の時代を断罪しているわけだが、この断罪は実は現在にも向けられているのである。逸楽と放恣の理念が今再び猖獗を極めようとしている十九世紀前半当時の現在にである。すなわちゲーテのロマン派批判である。ゲーテによれば何の痕跡も残さず突然消え失せた筈のレンツは、早くもロマン派たちによって再発見されている。例えば、このゲーテのレンツ評伝が書かれる七年前、一八〇六年、ブレンターノはレンツの作品を激賞している。ティークは一八二八年、レンツ全集を編集しているという具合にである。ロマン派におけるレンツは、グロテスクな幻想家、ロマンチックなレンツである。つまりゲーテのレンツ観とロマン派のそれとは、ほぼ一致していることになる。ただ評価の符号が逆になっているだけである。とはすなわち、ゲーテのレンツ批判はロマン派批判と軌を一にしていることになる。形式と特性を失ったがために道化とカリカチュアに墮したのがレンツとロマン派というわけである。ゲーテのレンツ評伝はレンツ批判に名を借りたロマン派批判と読めなくもないくらいである。

いずれにせよ、「詩と真実」第十四章のレンツ評伝は後世の、とりわけ十九世紀の評家に決定的な影響を与える。「夜空をさっと流れ行く彗星のように……」という表現は、色々思う所があるが、やはりすこぶるつきに魅力ある文章に違いない。この簡潔雄渾な表現にほとんどの後世の評論家が痺れてしまったのもわかるような気がする。P・Thファルックなどはこの魅力ある表現の呪縛から逃れんとして、故郷リフランドのレンツに照点を当てているくらいだ（ファルック「リフランドのレンツ」）。

十九世紀のドイツ文学史におけるレンツ観はここに定まったようだ。ナポレオンの出来損いがワレンシュタイン、ゲーテの出来損いがレンツという図式もうまれてくる。否、それではワレンシュタインが余りにも可哀相だ。ナポレオンと彼との差はゲーテとレンツとのそれ程にはかけ離れていないと説く評家もでてくる始末だ。レンツは抹殺されていく。ビューヒナ

一經由のブレヒトによるレントツ愛容はまだまだ先のことだ。十九世紀の評家はこぞってゲーテのレントツ評伝に従いレントツを断罪する。最初は恐る恐る、次第に憎悪に燃え、凶暴になっていく。上御一人、ゲーテの言を頼りにレントツを抹殺していく過程で、一つの笑えぬフアルスがうまれる。これから紹介するゼーゼンハイムリートを巡る「作者は誰か」論争がそれだ。

一八三五年九月、一人の若い学徒が聖地巡礼の旅に出る。聖地とは偉大なるゲーテがその足跡を遺した各所である。これは当時の流行である。さて、学徒、ハインリツヒ・クルゼは聖地の一つ、エルザス地方はニーダーブロンという、とある寒村を訪れる。そこには、フリーデリケ・ブリオンの末妹、ゾフィー・ブリオンが住んでいる。彼女こそは、シュトラースブルク近効の小村ゼーゼンハイムを舞台にした、ゲーテ、フリーデリケ恋愛事件の重要な生き証人である。功徳が顕れたのか、クルゼはここで思わぬ捨い物をする。

この思わぬ捨い物について語る前にかの恋愛事件について見ておいたほうがあととのためによいかも知れない。といっても、これは余りにも有名な事件なので、二人の直接の関係は素通りし、レントツはこの事件にどうかかわったかを見ることにする。

ゲーテは一七七七〇年初め、学位を取得せんとシュトラースブルクにやってくるが、当時、エルザス地方は仏領であった。独仏間の領土問題の絶えざる懸案地であったこの地方はある時は独領、ある時は仏領と絶えず領有国が変り、当然ながら独仏文化混淆の地でもあった。しかし、どちらかといえばドイツ的色彩が濃く、駐屯兵の制服を見て初めてフランス領であることがわかるほど、街のたたずまいはドイツ的であった由。御存地「最後の授業」はフランス国粹主義者の誇張がかなり混じっているといえよう。

ところが、次第に、街の上流階級はパリモードに染まり始め、中流階級はこれに抗してあくまでもドイツ風を守り抜くと

いう現象が生じ、見方によれば、大變興味ある街並となり、事実、当地の大学は多くの外国人学生を引きつけたようである。

そんななかでゲーテは街の中心に聳え立つシュトラースブルク大寺院を見る。まさしくドイツの様式に他ならないゴチック様式に感搏たれ、ゲーテは古きドイツ文化が当時のフランス文化をはるかに凌駕していることを嬉しく思う。

ゲーテと同年にヘルダーもやってくる。異邦フランス文化に接しながら、フランス似非古典主義に背を向け、ドイツ土着の文化に目を向ける。このヘルダーの影響を受けゲーテもドイツ民謡に心引かれ、自らの詩作にそのエッセンスを忍び込ませることになる。フリーデリケの為に民謡のメロディーに合わせて詞を作ってみせる。これが後、論争の種となるゼーゼンハイム・リートである。

さて、レンツはクライスト男爵兄弟の教育掛として一七七一年春、ヘルダーと入れ替るように当地に入る。レンツはその前、三年間、父の意を受けて、牧師になるべくケーニツヒスベルクで神学を修めようとするが、熱心に聴いた授業はカントの哲学講義だけで、あとはろくすっぽ大学に通わず、只管、文学にいそしんでいる。牧師登用試験も済ましておらず、いわば学業半ばの身である。しかし、それにもかかわらず、彼は当地でなかなか学生登録をしようとはしない。なる程彼は、ザルツマンを中心とした文学サークルでめきめき頭角をあらわし、誰からも一目おかれるようになるが、だからといって、筆一本で喰っていけるほど当時の出版状況は甘くはない。シュトルム・ウント・ドラングの面々も将来のたつきの道を求めて、ゲーテは法学部に、ユングシュトリングは医学部に……とそれぞれ学生登録をしている。レンツも神学部に登録すればよさそうなものを、彼は決してそれをしない。

「私は正流派ではないにしてもよき福音派キリスト教徒であります。私が自分の信条をこのまま保つことができれば、それは神のお蔭であり、神はこれが（＝神学）、私の心に最も適う学問であり、これからもそうあり続けるだろうことをお教

え下さったのです。しかし、私は牧師になる気はこれっぽっちも持っておりません……」。レンツがザルツマンに宛てた手紙の一節である。彼は決して神学が肌合わなかったのではない。神学研究が現世的利益といささかも噛み合わなかっただけである。神学をたつきの道とみることを潔しとしなかったということである。これはこれで一本筋が通った話で、これについてどういふ必要はない。しかし、それでは将来の生活はどうするかといえ、それについては何も考えない。呑気な限りだ。こんなレンツを心配してザルツマンは法学を頻りに勧める。彼はゲーテに外交官の道を勧めたが、レンツにも同じ道を進ませようとしたのであろう。幸いシュトラースブルク出身の法学徒には外交官の口がけっこうよく掛かる。特に当時のロシアは、フランス語、ドイツ語、共に自在に操れる人材を外交官に欲していたようだ。当地でレンツと最も親しく交際していたオットは通訳官としてペテルスブルクに赴任しているし、クリンガーはロシアの將軍として人生を完うしている。レンツの生地リフランドは当時、ロシア領である。こんな恰好な就職口はまたとない。しかし、彼は一向に腰を上げようとはしない。ザルツマンもこのことに関しては遂に匙を投げることになる。

一七七二年春、弟男爵、エルンスト・ニコラウス・クライストの属しているフランス連隊は、シュトラースブルクよりフォルト・ルイに陣地を移す。勿論、レンツもこれに従う。フォルト・ルイは人口四千程の小都市である。花匂うが如く美しきライン平原にある「フランスの庭」の景勝地の一つと謳われた小村ゼーゼンハイムとわずか一時間の所にある。すなわち、ゼーゼンハイムからライン河畔まで三十分、そこから二十分の所にフォルト・ルイはあり、この道程はライン川の島々がよく見られ、絶好の散歩道であった由。先に紹介した、ゲーテのレンツ評伝中の逸話のなかにでてくる迷騎士レンツのお相手、つまり兄男爵の恋人はフリーデリケの親しい女友達である。そんなわけでレンツがフリーデリケの生家、ゼーゼンハイムの牧師一家に親しく出入りするまでにはさ程時間がかからない。父牧師の病気の折り、レンツは代わって説教をしたぐらいである。このことを彼はザルツマンに特意気にかけている。

さて、レンツが知り合った頃のフリーデリケは恋人ゲーテに捨てられ、かつての潑刺とした屈託のない乙女とは打って変り、いまや、打ちひしがれた憂い顔の佳人である。レンツの性格である、同情し、たちまちのうちに恋に落ちるのは火を見るよりも明らかである。思いを寄せる乙女にせつせとリートを書くのは詩人の常、レンツもここで後の論争の種を落している。

そんな或る日、フリーデリケは、母、姉妹と一緒に母方の伯父を訪ねて、二週間の予定でザールブリュッケンに旅に出る。レンツはフリーデリケ不在の悲嘆をザルツマンに宛ててくどくどと書き、彼女への愛を打ち明け、挙句には「この手紙は燃してください。こんな大事を、不実な紙一枚に打ち明けねばならないことが悔まれてなりません」と書く。そして御丁寧なことに「お願いですから、私の愛しい女ひとのため、私のため、ここに書かれたこと一切を秘密にしておいて下さい」と追伸している。このいかにも思わせぶりの追伸は、あたかも、フリーデリケもまたレンツの愛を受け入れたのだと言わんかのようなのである。後世の評家はこぞってこれを見逸さずレンツを厳しく答めることになる。

先ず第一に、レンツのフリーデリケへの愛そのものがまやかしである。レンツはゲーテの猿真似をしたに過ぎない。つまり、自分もゲーテのようにこの愛に値する人間であることを示すために一幕の喜劇を演じたにすぎない。もつと非道いものになると、偉大なるゲーテの捨てた恋人に恋するというレンツの「厚かましき」に開いた口が塞がらないとまで言っている。開いた口が塞がらないのはこちらの方で、これはいくらなんでも言いすぎである。これら評家を作りあげた、ゲーテを頂点に戴くドイツ文学のヒエラルキーの余りもの凄さに思わず首を竦める思いである。

「彼らは、ゲーテは一七七二年当時、まだ「偉大」なゲーテにはなっておらず、レンツ同様、一人の駆け出しの詩人に過ぎず、二人の作品は、その後、二年たっても読者によって等価値であると思なされていくことを忘れていく」。これは、今のところ、唯一無二の信頼に足る大部のレンツ伝を書いた伝記作者、M・N・ロサノフの言であるということを差し引

いてみても、まずは順当なところだろう。

しかし、問題の手紙についてはどうか。当時のドイツ文学の泰斗、つまりはゲーテ学の泰斗でレンツにとって天敵とも覚しいハインリッヒ・デュンツァーは、これは噴飯もの、ゲーテへの重大な侮辱であり、こんな嘘八百には我慢ならないと決めつけている。確かにレンツとフリーデリケの間は相思相愛といったものではなく、レンツの一方的片思いに終わったようだ。しかし、ゲーテが活写したように思い込みの激しいレンツのことだ。フリーデリケのなに気ない素振り、他意のない言葉をとことく誤解し、自分への愛の告白であると独り決めてしまうことは充分に考えられる。文目もわかぬ虚実皮膜を縫うことであられる芸術作品のなかであればレンツの言う相思相愛には詩的真実という言葉が用意されるであらう。しかし、純然たる私信とあれば自ら事情は異なってくる。一步間違えれば人を傷つけもする。やはりこの私信は笑止千万ととられても仕方がないようだ。だが、嘘八百と決めつけるのは些か酷である。レンツは詩と真実の間に激しい境界を引くのが苦手なだけである。詩的想像―願望がいつのまにか彼の裡のなかで紛うことなき真実となってしまうのだ。この私信の受け手ザルツマンはレンツを知悉している。レンツらしい激しい思い込みを「笑い飛ばしはしない。いやみや、皮肉の一つでも飛ばして冷水を浴せることはしない」(ロサノフ「レンツ」)。酷吏の如き後世の評家とは大分違う。ザルツマンは慈父の如く、レンツの誤解をやさしく解く。もつともこの説得がどれ程功を奏したかは解らない(この項、ロサノフ前掲書、参照)。

さて、話、戻って、ハインリッヒ・クルゼがニーダーブロンにフリーデリケの末妹ゾフィーを訪れたとき、彼女は既に齢八十を越していた。老嬢は時折り訪れてくるゲーテ崇拜者との茶飲み話を唯一の楽しみに当地にひっそりとつましやかに暮している。そんな老嬢が、当時十九歳の生意気盛りでもあるクルゼのどこが気に入ったか、ドイツ文学史に残る大発見の手柄を与える。フリーデリケに宛てたゲーテの未発表リート(一部、既発表)の写しを見せ、剩え、その写筆を許してくれらるというのだ。クルゼは、一瞬、彼女の言うことが呑みこめない、やがて、狂喜乱舞する、次には事の余りもの重大さに思

わず肅然とする、しかし体の奥処から伝わってくる震えを押える術とてなく、手さばきあやしく写筆したに違いない。彼は五葉の紙を二つ折りにして写筆する。写筆したリートは10。他に今一つのリートを口述筆記する。合計11のリオートの写しをクルゼは後にザルモン・ヒルツェルに手渡す。これをここで便宜上、クルゼ稿と呼ぶ。更に、ゾフィーの手許にあった稿をゾフィー稿と呼ぶことにする。

さて、出版人であり、ゲーテ学者でもあったヒルツェルは、譲り受けたクルゼ稿を一八七五年、「若きゲーテ」誌に発表する。11のリオートの掲載順は次の通り（皆、標題がないので、それぞれを書き出して示すことにする）。

Nr 1 目を覚ましておくれ、フリーデリケ

Nr 2 いま天使は、僕の気持をわかってくれる

Nr 3 いま騎士はお茶目さんたち

Nr 4 ああ、君はいつてしまうのか

Nr 5 何処に君はいるのか。忘れ得ぬ女よ

Nr 6 いますぐに行く。

Nr 7 小さな花よ、小さな葉よ

Nr 8 もうすぐ小鹿に再び会えるのだ

Nr 9 ある暗いくすんだ朝

Nr 10 心がふるえた

Nr 11 天に向かって一本の幹が

これが、これからおこる論争の種となるものだ。これらのリートは全てゲーテのものなのか？ レンツのものも含まれているのではないか？ という訳だ。もつとも11のリートのうち、Nr 7とNr 10はゲーテが生前、自作集に自ら選入してあるで論争はこの2つを除いた9つのリートを巡ることになる。

勿論、この種の論争は稿についての疑義詮策から始まる。異校が存在するからだ。クルゼのニーダーブロン訪問二年後、一八三七年、アウグスト・シュテーパーがゾフィー嬢を訪れ、クルゼ同様、写筆を許される。ただし、この稿に——これをシュテーパー稿と呼ぶ——収められているリートは8つだけである。シュテーパー稿とクルゼ稿はほぼ一致するが、若干の異同がある。Nr 5、第三節、第三行、クルゼ稿は〈街と野原〉となっており、シュテーパー稿は〈森と野原〉となっている。ところで、このシュテーパー稿はゾフィー稿よりの写しではないという。「詩人レンツとゼーゼンハイムのフリーデリ

ケ」(一八四二年)によると、シュテーパーがゾフィー嬢を訪れたとき、クルゼが写したオリジナル版、ゾフィー稿は紛失してしまったとのことである。仕方なく彼はゾフィーが正確に写し取ったと請け合うゾフィー稿のコピーを写し取ることになる。

ゾフィー稿の紛失は何を意味するのか？ それよりもなぜゾフィー嬢はオリジナル版ゾフィー稿の写しをとっておいたのか？ まるでオリジナル版の紛失を予期していたかのようである。謎を呼ぶところである。

ところで、クルゼ、シュテーパーの間にも一人、誰であるかはわからないが、ある人物がゾフィー嬢を訪問している。この訪問氏は「文学談話」誌、一八三七年一月五日号に匿名記事、「エルザスとロートリンゲンよりの手紙」のなかでゾフィー嬢訪問のことを書き、リートNr 5を發表している。このいはば匿名氏稿の第三節二行はシュテーパー稿と同じになっている。匿名氏は先の記事でオリジナル版ゾフィー稿を見たと言っている。すると、クルゼはゾフィー稿に若干手を加えたのか？ ゾフィー稿のコピーの写しであるシュテーパー稿と匿名氏稿が同じ読みをしているのでクルゼは旗色が悪い。しかし、匿名氏はともかく、シュテーパーも余り威張れたものではない。

実は、シュテーパーはニードーブルン訪問直後、一八三七年三月九日、グスタフ・シュヴァープに宛てて「ゲーテの詩をフリーデリケの末妹の手にあつたオリジナルから、外交官のような正確さで写し取りました」(傍点筆者)と書いているのだ。この私信は、一八九四年、エルザス詩神年鑑に發表されてしまったのだ。ゾフィー嬢の所にはオリジナル稿が紛失してしまっていたと書いた自著が出版されたのは一八四二年。この矛盾はどうするのか？ クルゼは、当時十九歳という若い学生に過ぎなかったのだからまだしも、シュテーパーは既に二十九歳の小壮の学者であった。当然、オリジナルという言葉が何を意味するかを充分承知して然るべきである。それなのにこの矛盾。そこで、ズィープスは「当時二十九歳の学者の外交官のような正確さについて言わしてもらえれば、同じ原本を、今日は二十一歳のゲーテのオリジナルだと言ひ、明日は、

いや、八十歳になるゾフィーの写しであると言うようでは、その正確さを疑いたくなるようなものだ」とクルゼ稿に軍配を挙げている。他の評家もほぼズィープスと同意見で、リートNr5に關してもクルゼ稿の読みを採っている。

他にも一つ異校がある。ファルツクは自著「ゼーゼンハイムのフリーデリケ・ブリオン」(一八八〇年)のなかでこう語っている。レントスがモスクワで哀れな行き倒れに成り果てるとき既に精神、間に包まれていたとは夙に周知の事実である。モスクワ時代、レントスの行き場のない哀しい魂をやさしく先導したのは、ミヒャエル・イエルツェンフスキーである。彼はレントスの遺稿のなかからリートを拾い集め写筆していたという。そのなかにゼーゼンハイムリート、Nr3、Nr4、Nr5が入っているというのだ。これをファルツク稿と呼ぶ。このアルツク稿の存在を素直に認めれば、リート、Nr3、4、5に關しては問題が片づく。この3つのリートは、ゲーテのものではなくレントスのものとなる。

しかしそうは簡単に問屋は卸さない。Nr3は絶対にゲーテの作であるとするズィープスはこのファルツク稿の存在について「ゲーテの文学を追い求め、ゲーテに間違えられるに勝る名譽はないと念じていたレントスがゼーゼンハイムでゲーテ作のリートいくつかを写し取り、それを自作のリートと一緒に保管していたとも考えられる」とし、大体、ファルツク稿は、イエルツェンフスキーの死後、ファルツクの手に渡るまで六十五年の間、どこをどうさ迷っていたか、皆目見当のつかない代物であると難癖をつけている。Nr3だけでなく、11のリート全てがゲーテの作だと説くデュンツァー、ユリウス・ゲベルらもこのファルツク稿は胡散臭いとしている。後者の言を引くところである。「レントスがゲーテとフリーデリケと關係に關するものは悉く手に入れようとしたことには明白な証拠がある。そしてレントスがフリーデリケから問題のリートのコピーを手に入れたというのにはあり得ないことではないように思える。ちやうどレントスがゲーテからゲーテのドラマ「プロメテウス」のコピーを手に入れたように」。

このファルツク稿のNr3には、「一七七二年九月四日、ヴァイセンブルクにて」という日付まで入っている。これは他の

稿にはないことだ。たしかにレンツは、同年九月二日に弟男爵クライストの連隊と共にヴァイセンブルクに赴いている。ザルツマン宛てのレンツの手紙にそう書いてある。しかし、この日付—ファルツク稿にある—の真偽について多くの疑義が生じている。リートNr3はレンツの作であると説くアルバート・ビルショフスキーでさえ、この日付はイエルトゥエンフスキー、ないしはファルツク自身による追記に過ぎないとあっさり退けている。カール・ヴァインホルトはファルツクによる虚偽の追記としている。因みにヴァインホルトはレンツの最初の詩集の編者であり、レンツにはおおむね好意的な立場を採っていて、このNr3に関してはゲーテ作説を唱えている。ラインホルトはファルツクの「九月二日、水曜日、レンツはゼルツを経由してヴァイセンブルクに赴いた。彼は九月四日、馬にまたがりローヤル・アルマン連隊の先頭にたつて当地に到着した」という記述は全くのデッチ上げだと言いつけている。彼自身の言をひいてみる。「しかし、レンツは九月二日には既にヴァイセンブルクに到着しており、そこから彼は父宛てに手紙を書いている。その手紙のきわめて古い写しを私は、レンツの父による表題つきでもっている」。弟男爵クライストは別にローヤル・アルマン連隊の連隊長でもなんでもない。レンツにいたっては、そのクライストの一介の教育掛にすぎない。そんな「レンツが連隊の先頭に立ってヴァイセンブルクへ入城したなどと全く馬鹿げたつくりごとである」というのがヴァインホルトの結論である。

どうやらファルツクは大分形勢が悪いようだ。しかし彼はゾファイは勿論、クルゼ、シュテーパーらと違って、この「作者は誰か」論争の一方の当事者である。疑いなくゲーテ作であると信じ、只管、リートを写し取った後者らと違い、この論争において一つの説をなしているのだからそう無下にはできない。

この論争を一渡り見たレンツの伝記作者ロサノフはこのファルツク稿に関して、イエルトゥエンフスキーが写し取ったリートのうち、問題となっている11のリートのうち重複しているのは、Nr3、Nr4、Nr5の3つだけであるという事実注目せよといっている。つまりゲーテのものなら、なんでもかんでも写し取り、それを自分のリートのなかにしのびこませておく

というのがレンツの流儀であったとすれば、この3つ以外のリートもやはりそうした筈ではないかというのだろう。Nr 4、Nr 11に関しては、レンツ作説を探るズィープスも、こう抗弁されると少しは怯むかも知れない。しかし、デュンツァーは怯まない。怯むどころか、レンツはモスクワで、Nr 3、Nr 4、Nr 5を自作であると言いつけるために自分のノートに他の作品と一緒にしのびこませていたのだと強弁している。さすがにこの強弁には、他の評家もついていけないようだ。ロザノフがレンツの伝記作者らしく、デュンツァーのことを、彼は「我々の詩人をいつも敵対視している」と憤慨しているのもわかるような気がする。

さて、色々と異校があり、廻り道をする事になったが、結局の所、元はゾフィー稿にある。そしてそのゾフィー稿から写し取られ、かつ世に公表されたクルゼ稿をスタート台にして、この「著作は誰か」論争はおきている。つまりはクルゼ稿を吟味せねばならぬということだ。

クルゼは、クルゼ稿をヒルツェルに引き渡した後、一八七五年「ドイツ展望」誌にゾフィー稿発見のあらましを紹介している。それによると、クルゼはゾフィー稿に二様の筆跡を認める。男文字と女文字である。ゾフィー稿は、二人の男女の筆跡により書かれている。この二人以外の第三者の介在を認めていない。もっとも、Nr 1の筆跡には面くらつたらしい。最初、クルゼは第三者の介在を認めてか、クルゼ稿のこのリートに「他の者の筆跡」によると付言したが、後にこの「他の者」という文字を消し、その上に、別のインクで「投げやりで、くずした筆跡」とつけ加え、改めて、第三者の介在を否定している。

「他の者」とは勿論、ゲーテとフリーデリケ以外の者という意味である。クルゼ稿のリートNr 2とNr 3には「フリーデリケの筆跡」と付言されており、またクルゼは先の「ドイツ展望」誌で、リートNr 7もまた確かにフリーデリケの筆跡によるものであったと回想している。つまり、クルゼによれば、ゾフィー稿はリートNr 2、Nr 3、Nr 7はフリーデリケの筆跡によ

って書かれ、残りのリートはNr 1も含めて、全てゲーテの筆跡によって書かれていたということになる。

ゲーテとフリーデリケの恋愛事件の唯一の生き証人はゾフィー・ブリオンである。一途にゲーテに憧れている若い学徒は二人の青春時代の思いでを聞きにこの生き証人を訪ねる。その彼女が二人の青春の一齣を詩ったリートをみせてくれるというのだ。筆跡は男文字と女文字。であれば余程のヘソ曲りでなければ男文字はゲーテの筆跡、女文字はフリーデリケの筆跡と思うのは別に不思議ではない。別にこの若き学徒は以前からゲーテの筆跡に蘊蓄を傾けていたわけではない。生き証人ゾフィー嬢の言葉があればそれで充分である。

しかし、いわゆるテキストクリティークの世界ではこれで充分というわけにはいかない。旺盛なヘソ曲り精神がなければこの世界では喰っていけない。フォン・レーパーは学徒クルゼの判断を「我々はゲーテの筆跡を簡単に間違える可能性のある、この分野には全く未経験な一学徒の判断を全く度外視することができ」とまで言っている。

常に底意地悪く疑いの目を向ける輩だけがこの世界では幅を利かす。必要とあらば、生き証人ゾフィー嬢の証言すら疑ってかかりもする。クルゼの訪問時、ゾフィー嬢は既に八十歳を越えていた。一八〇一年以来、一八一二年に亡くなった姉、フリーデリケと離れて生活していた老嬢が、この年になっても三十年前のことを正確に記憶しているというのもおかしい話だ。だいたい、彼女がゲーテのリートを姉より相続するというのが考えられない。姉フリーデリケはゲーテとの離別後、彼との思い出の花園を他人に土足で踏み込まれるのを嫌って、二人の関係については一切沈黙を守り、手紙類もことごとく焼却した筈ではないか。ところがゾフィー嬢は、フリーデリケの妹として絶えずゲーテのことを聞かれるうちに、例えば、この作品はゲーテのものではないかと、ふと思った程度のことを、いや、これは確かにゲーテの作であると堂々と宣言したくなる誘惑に駆られたのではないかと……。と、仮にゾフィー嬢がこれを聞いたら、気を悪くするどころか、その場で卒倒、悪くすればそのまま憤死しかねないことまで平気で言う評家もいる。げに恐しきものなりだ。

評家はいろんなことを言う。例えば、こうだ。ゲーテとレンツの筆跡は素人目にはそれとわからぬ程に互いに似通っている。というよりはなんでもゲーテの真似をしたがるレンツは筆跡もゲーテに似せる。恋愛も真似る。すなはちフリーデリケに恋する。恋する女性にリートを贈ることも真似る。ゲーテが自らリートを書き込んだ紙の余白に自分のリートをゲーテに真似た筆跡で書き込んでいく。

アルフレッド・シュレーダーの論旨はこれよりはるかにましである。クルゼ稿はヒルツェルの死後、ライプツィヒ大学図書館に収められたという。彼はこのクルゼ稿の完璧なコピーを手に入れ、それを基に理を詰めていく。勿論、これには、クルゼがゾフィー稿を一字、一句間違わずに完璧に写筆したという前提がある。ともあれ、シュレーダーはクルゼ稿にある正書法上の問題、句読法の癖、押韻のやり方、表記上の癖等々を、当時のゲーテおよびレンツの作品、日記等を照し合せ、つぶさに検討する。そしてこれにより筆跡を鑑定する。そして最終的にリートの作者を推理していく。

しかし、これとて、煎じ詰めれば、結局は状況証拠の積み上げによる推理にすぎない。物的証拠に欠けているのだ。唯一の物的証拠であるゾフィー稿は紛失してしまっているのである。そこで、この「作者は誰か」論争の論手たちはほぼ全員、物的証拠によって、つまり外的基準によって作者を決定することを諦めている。外的基準が得られなければ残るは内的基準である。いわゆる目隠しテスト、ないしは利き酒コンクールの始まりである。しかしこのテスト、ないしはコンクールには後で勝ち負けを判定する、絶対的物証を握っている審判がない。絶対的物証が欠けているところでは、様々な証言が飛びかおうとも、それは所詮、藪の中である。藪の中を良いことに評家は言いたい放題のことを言っている感もする。ただし、各評家はある一点では全員、足並を揃えている。つまり、偉大なゲーテの無謬性に対する盲目的信頼である。このリートの書かれた当時、ゲーテはレンツと共にまだ駆け出しの詩人にすぎず、誤りも犯すだろうし、駄作も書くだろうという判断があらばこそである。全ては梅檀は双葉より芳し一点張りの論陣を張る。それがファルスをうむことになる。しかし、これは同時

にレンツ虐殺に等しいファルスでもある。いよいよ笑えぬファルスの幕明けである。

論争の参加者は、フォン・レーパー、ヴァインホルト、ズイープス、ファルック、ビルシヨフスキー、エーリツヒ・シュミット、リヒャルト・ヴァイセンゼルス、デュンツァー、ゲーベル等である。

11のリートのうち、Nr7とNr10はもともと論争の対象外にあるとは先に書いた通りである。残る9つのうち、Nr2、Nr6、Nr9は評家全員が揃ってゲーテ作説を唱えている。ところがゲーテ全集ワイマール版ではこれらのリートは出所未詳とされている。これはいかに慎重さでもって鳴るワイマール版といえども、その慎重ぶりはいささか度が過ぎてしていると難じている評家もいる。いずれにせよ評家のなかで論が分かれているのは、Nr1、Nr3、Nr4、Nr5、Nr8、Nr11の6つのリートである。

ところで、この「作者は誰か」論争の主役を挙げるとすれば、まずビルシヨフスキー、それにズイープスである。ゲーテ、フリーデリケ、それにレンツの関係について、当時の数少いレンツ擁護派であるヨハネス・フロリツツハイムと激しく論争を闘わしているデュンツァーは、この「作者は誰か」論争に関していえば、その強引な論旨のため脇役に甘んじているといえよう。

そこで、ビルシヨフスキー、ズイープスの対立を軸に話を運ぶほうが、この論争が繰り広げる笑えぬファルスを浮彫りにしてくれそうである。

ビルシヨフスキーは、Nr1、Nr3、Nr4、Nr5、Nr8がレンツ作、Nr11がゲーテ作としており、ズイープスは、Nr4、Nr11をレンツ作、残りをゲーテ作としている。

先ずリートNr11について。これはゾフィー稿にはなく、クルゼが口述筆記したものである。ビルシヨフスキーはこれにつ

いてほとんど言及せず、単にゲーテ作説としていただけである。ズイープスは、ビルシヨフスキーの論法にいちいち異を唱えるべく筆を執っているので、論敵がほとんど言及していないリートに関してには勢い筆が進まない。

曰く、

天に向かつて一本の幹が

伸びている、驕慢な大地よ

という書き出しが、レンツの他の作品（ヴァインホルト編「レンツ詩集」Nr 17）の書き出し

天に向かつて恐れることなくそれは伸びている

よくみるがよい、その微動だにせぬその様を、

に酷似している。さらにリート末尾もいかにもセンチメタリックでレンツを彷彿させている。ゆえにレンツの作。ロサノフもズイープス説に追随している。

次にリートNr 4。これは、デュンツァー、ゲーベルを除いた全ての評家がレンツ作説を採っている。

詩意はこうだ。ああ君は去ってしまうのか、素晴らしい夢からさめてみるとこの苦しみが待っていたとは。君がいなくては、太陽も暗く光り、大地はうつろとなり、木々も黒く咲き、葉は色褪せ、生きとし生けるものみな朽ち果てると、恋人に去られた男の嘆きが、これでもか、これでもかと、しつくこ詩われている。

レンツ作説を唱える評家は皆一様に、リートの内容と「詩と真実」に書かれている内容との著しい乖離を指摘している。

「詩と眞実」によれば、フリーデリケはゲーテに惚れぬいており、彼にこんな愁嘆場を演じさせることなどとても考えられない。第一、「偉大な」ゲーテは勿論、恋の名手。否、その高潔な人柄が巧まずして女性を魅きつける。魅きつけずにはおかない。深情に迷惑を蒙ることはあっても恋人に去られたことはない。一方、レンツは恋の悪手。巧みに巧んだ手管も直ぐに露われ、嫌みとなり、百戦百敗。そのしつこい程の嘆きぶりも今では堂に入ったもの。従ってレンツ作。非道い話だ。

もっとまじな説明をすると、ゲーテは常に幸運な恋人で、内面の動きも苦しみも無理矢理表現するへ悲嘆、驚き、絶望といった言葉をリートに使用することはなかった。また「太陽が暗く光り、木々も黒く咲く」などのような誇張法にしがみつ়くことはなかったとなる。

ゲーベルはこれに対し、ゲーテの恋愛不敗神話を打ち捨てねばならない。それにこのリートがゼーゼンハイムで書かれたと推定するから「詩と眞実」との不一致が目につき、ゼーゼンハイムでフリーデリケにふられたレンツが浮び上ってくるのである。ところが、これは、フリーデリケがシュトラースブルクにゲーテを訪れ、またゼーゼンハイムに戻った折に、着想されたと推定すればへ素晴らしい夢からさめてみると……という第一節の表現も納得がいくのだ。ゲーテらしくないと言われる表現へ悲嘆、驚き、絶望……もゲーテの他の作にも見られる、としている。

いずれにせよ両説とも、「詩と眞実」が問題となっている。エツカーマンに語った「私の作品には私が体験しないものは一行も書かれていない」というゲーテの言に引かれてのことだろうか。

さてリートNr 5。

何処にいるのか、いま、忘れ得ぬ人よ

何処で君は歌っているのか

何処の田園、はた小邑が君を得て
笑い凱歌をあげているのか

君がいなくなつてから陽は射そうとせず
そして空も

君のはらからと一緒に
君をしのいで泣くばかりだ

僕たちの喜びは君とともにみな消え失せ

街と野原は至るところ静索しじまが

支配し、小夜鳴鳥も君を求めて

遠く飛び去つてしまった

戻つておいで！ ほら、牧人も家畜たちも

君を心配して呼んでいる

戻つておいですぐに！ さもないと、五月という月も

冬となつてしまふだろう

ゾフィー稿ではこのリートに「私がザールブリュッケンにいたとき」(Als ich in Saarbrücken……) という余白書き込みがあった由。これをデュンツァーはこのリートの作者によるものではなく、フリーデリケの追記とみなしたが、他の評家もほとんど、卓見、さすがデュンツァーと、これに追隨している。もともとゲーテ作説を採るデュンツァー自身は後になって、その説と辻褃を合わせるべく、やはりこれは作者ゲーテが書き込んだものであると前言を翻している。

さて、この余白書き込みがフリーデリケによる追記だとすると、「私」とは当然ながらフリーデリケその人をさすことになる。レントツ作説を採る評家にはこれがまこと都合がよい。資料に表われている限りで言えば、フリーデリケのザールブリュッケン滞在はただ一度、一七七二年六月のことである。そして、その折、ゼーゼンハイムにいたのはゲーテではなく、他ならぬレントツである。しかも、このフリーデリケのザールブリュッケン滞在、即ちゼーゼンハイム不在を記した唯一の資料とは、先に引用したレントツのザルツマン宛の手紙である。一七七二年六月三日、フリーデリケは、母、姉妹と一緒に母方の伯父を訪ねてザールブリュッケンに二週間の旅程でかけている。レントツは彼女の不在を嘆き、彼女への思いの丈をぶちまけている。レントツ作説優勢の所以である。さらにファルック稿の問題もある。仮にこの稿が真正なものであればレントツ作説は決定的である。

これに対し、デュンツァーは、前言を翻し、このリートはゲーテが一七七〇年夏、ザールブリュッケン滞在の折成立し、問題の余白書き込みはゲーテ自身が書いたものであるとしている。ところが一七七〇年夏、ゲーテは未だフリーデリケを識らない。他に恋人と呼べるものもない。だとすると、ゲーテは「未だ遇わぬ恋」を詩ったのか。体験詩を打ち建てたゲーテらしからぬところだ。

同じくゲーテ作説を採るシュミットは余白書き込みをフリーデリケによるものだとしながら、資料に表われないからといって、フリーデリケがこれ以外に、伯父の所を訪れたことはない、何故、言い切れるのかと主張している。些か苦し

い所だ。

ヴァイセンゼルスの説は些か奇抜である。彼はこの余白書き込みに「く」にいたとき（「くpart」）という動詞が欠落していることに注目する。この書き込みは「当時よくうたわれていたある民謡の書き出しであり、そのメロディーにあわせてゲートはこのリートを書いたのだということと言わんとしているのではないか。ゲート自身の言により、彼がフリーデリケのために、当時よく知られたメロディーに歌詞をつけてあげたということは知られている。だとすると、このリートNr 5について、このリートがゼーゼンハイムでの恋愛エピソードの一つであると証するためにはフリーデリケがザールブリュッケンに旅したと仮定する必要はない。ただ彼女がどこかに旅をし、ゲートが残されたということだけを仮定すれば、それで済むのである」。仲々面白い説である。しかし、肝心の、当時よく歌われ、知られていた筈の「私がザールブリュッケンにいたとき」という書き出しで始まる民謡が、いまのところ、どこにも見当たらないというのも妙な話である。

フォン・レーパーはファルック稿の存在が発表される以前に、このリートNr 5をレンツ作であると唱えているが、彼の論拠は、先に紹介した余白書き込みとリートの語法にある。冒頭の「何処にいるのか、いま、忘れ得ぬ人よ」(Wo bist du izt mein unvergeßliches Mädchen) の「いま」(izt) という語の表記法がまさしくレンツ特有であるとしている。ゲートは当時、「いま」を jetzt あるいは jetzo と表記していたと主張している。もつともズイープス、デュンツァーはこの表記法は、ゲートの他に詩にも見られなくはなく、別にレンツの専売特許ではない、ゲーベルはさらに、この izt は単に続く第二行の「く」を得て「besitzt」に韻をあわせたものにすぎないと、レーパー説を軽く一蹴している。

ところで、このあたりまでは、この「作者は誰か」論争も、論手たちそれぞれが直接証拠は得られずとも、様々な状況証拠を拾い集め、それなりの推理を立てており見るべき所が多い。しかし、論争もさらに一歩進み、リートの内容に直接立ち入ってくると状況は一変し泥仕合に堕ちて行くようである。

ビルシヨフスキーは様々な傍証を挙げた後、いよいよ、リートの内容に直接踏み込んで自説を繰り広げていく。「何処で凱歌を挙げているか」というアナクレオン風の気取った、飾り立てた言い廻しはゲーテとは全く無縁である。「ほら牧人も家畜たちも／君を心配して呼んでいる」という言い廻しは恐らく牧人詩から借りてきた全くの決り文句で、シュトラースブルク時代のゲーテがこんな安易な表現をする筈がない。それに、のつけから四つの疑問詩で始まるような理に落ちたリートをゲーテが書いたとはとても信じられない。要するにこのリートは全くの駄作で、ゲーテたるものこんな駄作を書く筈がないから作者はレントツであるというのだ。

これに対しゾイプスは四つの疑問詞で始まる第一節はまこと美しく流れ、まさしくゲーテ的である。そもそもこのリートは、その構成上の峻厳な論理と、心あふれる新鮮なトーンと、好ましいつい口ずさみたくなるような形式とが混然一体となった稀にみる秀作であり、ただ、あれこれと悩み、繰り返し、訴え、むきになるだけのレントツの恋愛リートとは天地の開きがあるとしている。さらに彼はレントツ作説の根拠の一つとなっている一七七二年六月のフリーデリケのザールブリュッケン滞在を逆手に取り、だからこそ、このリートはゲーテの作だとしている。レントツがゼーゼンハイムで一人残されたのは六月のことである。ところがこのリートは「五月」を詩っているではないか。レントツといえども仮にも詩人だ、詩人たるもの六月という月に自分が想う女性を詩いほしないだろう——この論旨は些か面妖な気がする——、押韻の必要から六月の代りに五月をもってきたとすればそれは没趣味の極みというものだ。さすがのレントツもそれはしないだろうというのである。

いずれにせよ、これを見ると、一つの同じリートを、片や全くの駄作であるからレントツの作であるといい、片や稀に見る秀作であるからゲーテの作だといっているわけで、どちらにしてもレントツは浮かばれない。ビルシヨフスキー、ゾイプスの二人のこのような対立は、リート、Nr 1、Nr 3、Nr 8 に関してもつと先鋭となり、結果、レントツはさらにズタズタにされていく。

リートNr 3はこうである。

いま騎士はお茶目さんたち

君たちがいた所近く駆っている

彼の馬はかなりゆっくりに進み

そして彼の心も劣らずゆったりとしていたよ

いま僕は心地良げに食卓についている

そして僕の冒険は終わった

テーブルには茹でた肉が、二、三切れ

いためた魚の切り身が一つ

夜は実のところかなりわびしかった

僕の馬は盲いたようにつまずいたものだった

でも僕は行く道を空んじていた、寺男が日曜日の

暗い朝、教会への道を迷わず進むように。

ビルシヨフスキーはこのリートの難点として次の二つを挙げている。

一つは韻律のぎこちなさである。韻の組み合せがまずい。男性韻と女性韻の交代がめまぐるしすぎる。最後から2番目の行が異様に長すぎる。

いま一つは、二度にわたって使われている「かなり」(ziemlich)という副詞である。これ程非詩的な言葉はなく、ゲーテがこんな退屈極まる副詞をこのような比較的短いリートに二度も使うとは一寸考えられない。

この二つの告発の前者に対し、デュンツァー、ゲーベルらは、こうした不規則性はゲーテの他の詩にも多々見られる。それにイタリア旅行まで、ゲーテはさ程、韻律にこだわることはなかったと反論している。

しかし、ヴァイセンゼルス、ズイープス、とりわけ、ズイープスによればデュンツァーらの反論は言わずもがなとなる。

大体、このリートはゲーテがフリーデリケ・ブリオン姉妹とピクニックでもした折り作られた純粹な機会詩、なんなら即興詩と言ってもよい。他に誰もいない書齋かなんかで、指を折りながら韻律の数を合わせ、鉛筆を舐め舐め苦吟したというものでは断じてないのだ。だからこそ、このリートはまこと軽やかに流れ、自然体そのものとなっているのだ。それはレンツのリートにみられる鈍重な歩みとは雲泥の差だ。

それにこのリートがかもしだす、ゲーテ一流のほのぼのとしたユーモアも忘れてはならない。二度にわたって使われている「かなり」という表現がそれである。天性の詩人でなければ、こうは書けない。恐らくゲーテはブリオン姉妹の普段の会話のなかで、この「かなり」という言葉をかなり多用したのだろう。ゼーゼンハイムのある手紙のなかでも二度にわたって使われている。「今は勿論、かなり調子よく、咳も、保養と運動のおかげで、かなりおさまっています」という具合だ。ブリオン姉妹はあるとき、彼のこうした口癖をからかい、ゲーテがそれに諧謔で答えたというのがリート成立の真相ではなからうか。

そしてリートの内容は「詩と真実」第十一章の「私がゼーゼンハイムで馬をつないだときにはもう夜もふけていた。……

略……二人の姉妹は戸口の前に腰をおろしているとところだった。娘たちはそれ程驚いた様子は見せなかった。しかしフリーデリケが「ほら言ったとおりでしょう、あのかたがいらしたわ」とオリヴィーの耳もとに、私に聞きとれるほどの声でささやいたときには私のほうこそびっくりしてしまった。二人は私を部屋へ案内してくれた。そこには軽い夜食が用意してあった。」という記述とピツタリくる。

どうやら、このリートNr3に関しては、ゲーテ作説のほうがかなり形勢有利にみえる。しかし先にも言ったように本稿はこれに対して説をなすものではない。論手たちの論証のなかでレンツはいかに扱われているかを見るのが目的である。ご覧の通り、ここでもレンツは非道い扱いを受けている。レンツのリートを取り上げ散々けなすのならまだしも、レンツの作か、ゲーテの作か、外的証拠でははっきりと決められない作品を一方は韻律がしっかりと構築されていないからといって、ゲーテではなくレンツの作であると、片方は韻律の規則に縛られず伸びやかな調べとなっているのでレンツの作ではなくゲーテの作であるとするのだ。どう転んでもゲーテは傷つかない仕組となっている。これではレンツもたまったものではないだろう。レンツにそぞろ哀れを催してくるというものだ。

残るリートはNr1とNr8だが、レンツの伝記作者ロサノフは、Nr8を巡ってのビルシヨフスキー、ズイープスの論争は他にも増して全く非道いものだと、噴満やるかたないといった口ぶりで書いている。

リートNr8。

もうすぐ小鹿に再び会えるのだ

もうすぐ、もうすぐ彼女を腕に抱きしめる

僕の歌はとてもあまい施律に乗って
晴れやかに舞いあがる

ああ、君は僕の歌を歌うとき

なんて美しく歌ってくれたことか

長いこと僕は歌わなかった

長いこと、長い愛しい愛の歌を

何故って、愛しい君が僕から逃げ去ったとき

深い苦しみが僕を酷く不安にさせたからだ

そして心のなかのほんとうの悲しみは

けっして歌になることはない

でもいまは歌う、そして僕はいま

甘い清らかな喜びで一杯だ

そうさ、この喜びは

どんなワインにも換えがたい

ビルシヨフスキーはこのリートは、先のNr 4、Nr 5と組んで一つのトライアングルをなしていると説く。つまりNr 4では恋人との別離直後の荒んだ気持が詩われ、Nr 5では荒みもいくらか和らぎ、早く帰っておくれと、エレギーの調べとなり、このリートNr 8で、恋人が戻ってくるという確かな期待が燃え上っている。ところでゲーテにこんな別れがあったとは考えられない。第三節のように恋人との別れを「僕から逃げ去って」しまったなどとゲーテが表現するとはとても思えない。言葉の繰り返しが多すぎる。「もうすぐ」が三回、「長い」も三回繰り返されている。第三節「深い苦しみが僕を酷く不安にさせた」という表現もくどくていけない。「深い苦しみ」とあるが、ゲーテならば簡潔に「苦しみ」とする筈で、「深い」というくどい形容詞は必要としないだろう。因みに、ヒルツェル編のゲーテ全集、第一巻、リートの部で「苦しみ」という語は29回登場し、そのうち27回は形容詞がついておらず、残りの2回は、「絶えざる」、「歓喜あふれる」という形容詞がそれぞれについているだけである。同じ「心のなかのほんとうの悲しみは／けつして歌になることはない」とは、真に悲しいときには歌うことなどできないものだという意であろうが、ゲーテとあるうものがこのように真の悲しみと詩化された悲しみとを区別するなどとは考えられない。これは詩われている悲嘆がデッチ上げられたものだとすることを図らずも表している全くへボな言い廻しである。結びの「そうさ、この喜びは／どんなワインにも換えがたい」もまた非ゲーテ的で書かずもがなの結尾である。レントツのようなあやふやな感性の持主ならばこんな酒席の歌にいかにもあいそうな結尾を持ってきたがるだろうが、ゲーテは決してそんなことはしない。

またもや、ゲーテ礼讃、レントツ酷評のオンパレードである。これに対し、ズイープスもまたゲーテ礼讃、レントツ酷評を正反対から繰り広げている。

ズイープスは先ず、このリートほど、レントツ的なところが一切見られないものはないとしている。つまりレントツが愛や憧憬を詩うときは、きまって悲嘆にくれるか、みじめたらしくなるだけであり、レントツにはこのリートにみられるような、

まこと愛にふさわしい晴朗さや新鮮さが全く欠落している。第三節「愛しい人が僕から逃げ去ったとき」は、単にフリーデリケが一時、ゼーゼンハイムを留守にただけだと解すればそれで済むのだ。それを逃げた、逃げたと大騒ぎするのは全くリートを解さない輩のするところだ。「深い苦しみ」という表現も、さほど苦にはならない。同じく「そして心のなかのほんとうの悲しみは／けっして歌になることはない」とは一つの情緒の素朴で真に迫った表現であり、その意味と形式、これはとてもレンツの手に負えないところだ。結尾「この喜びは／どんなワインにも換えがたい」はゲーテの真率さをよく表わしている。「この喜び」をただ恋人の帰還に対する喜びとだけ解するから話は変になる。「この喜び」とは、ワインをことほぐ気分と結びついた歌への喜びも込められているのだ。レンツはワインを詩うことは滅多にない。詩うにしても理屈っぽくて伸びやかさがない。例えば「太陽に」というリートでも、太陽はワインの母と詩われ、理屈っぽいことこの上ない。あるいはライン川を讚えるときでも、韻を優先させるために、ワインのことほぎをなおざりにしてしまふ始末である。要するに、悲嘆詩人への軽い揶揄を含んだ、歌の贈物に寄せるこのリートは大変新鮮で、つい口ずさみたくなるようで、それでいてしかも構成がピタリと決まり、優美さと軽やかさが備わっている。これはレンツの力量をもってしては到底、詩えるものではない。

以上が、リートNr₃に関してのビルシヨフスキー、ズイープスの論争である。この二人の論争を読んでいくうちに、いやな感じは増して行き、段々口が重くなってくる。精神の闇を生きだしたレンツはこれをどう聞くか。仮に私がこんな仕打を受けたとすれば、「人は泥棒、明日は雨」を己がクレドとして只管、沈黙を守ることになるだろう。

リートNr₁を巡る論争も、これまでと全く同じ展開を示している。その様相は、ビールなどの目隠しテストの結果の喰い違いが惹き起す無邪気な笑いとは違い、ある悪意に満ちた笑えぬファルスとなっている。

ビルシヨフスキーはこのリートNr₁は驚くほどの生硬さと不明瞭さがどっさり詰ったリートであるとしている。これに対

しズイープスは、これは即興リートであり、その滑らかな詩句の運びと、このうえなく美しい音節には舌を巻く他なく、即興の天才ゲーテにして初めてなせるのだとしている。

ところでクルゼ稿ではこのリートはクルゼ自身の手で、最初「他の者の筆跡による」と付言され、後にそれが消され「投げ遣りでくずした筆跡」と付言されている。つまり、クルゼは最初ゾフィー稿を見て他のリートにはない筆跡を見、先のように付言したが、後にそれを否定し、付言を改めたというわけだ（219頁参照）。

ビルシヨフスキーはこれを捉えて「これは他人の筆跡だ」とい思い込んでしまうほど普通の筆跡とは違うようなゲーテの生原稿を見たことがあるかとゲーテの筆跡鑑定家に問うてみると、皆一様に否と答えるだろう。それにひきかえレンツの場合、その筆跡はクルクル変わるの、「他の者の筆跡による」とか、「投げ遣りでくずした筆跡」とみられることもあるのである」としている。

ズイープス同様、このリートを即興リートの精華とみるゲibelは、これには詩人の眠たげな様子が活々と描かれている。事実、詩人は眠たかったのだ。言葉の推敲などというさかしらを詩人は勿論拒否する。そんなことをすればこのなんともいえぬ気分はぶちこわしだ。この朦朧とした気分が詩人の筆跡に影響を与え、「投げやりで、くずした筆跡」となるとしている。

他にビルシヨフスキーはこのリートのある一節と、ゲーテ作「パンドラ」のフィロレスの科白との酷似についてこういつている。仮にレンツとゲーテがそれぞれ別個に、我々には知られていない共通の種本を使用していなかったとすれば、この酷似は偶然の一致と主張する訳にはいかなない。だとするとこの酷似を理由に、この詰らぬリートをゲーテ作のものとし、この酷似以外に見られる全くレンツ的生硬さと、不明瞭さが偶々ゲーテの作にあらわれたとみなさなければならぬのか。否、やはりこれはレンツの作である。この酷似しているヶ所はレンツが発案し、ゲーテがそれを聞き、気に入る、記憶に留

め後にそれを使用した。あるいはゲーテが発案し、レンツがそれを聞き使用したかである。ゲーテとレンツは「互いに情報を交換していた」〔詩と真実〕のだからこういうことは充分起りうるのだとしている。

勿論、これに対し、デュンツァー、ズイープス、ゲーベルらは猛反発している。牽強附会も甚だしすぎる。いやしくも文献学者の採るべき道ではないと。

以上が、ゼーゼンハイムリートを巡る論争の一端である。この論争を見渡して、アルフレッド・シュレーダーは論手一人一人を短く論評している。

ビルシヨフスキーIIつまらぬことにこだわり、粗搜しばかりしている

デュンツァーIIあらゆる第二次文献によるあらゆる論究を素気なく拒否している

ズイープスII鬼ごっこ（目隠し）をするのに6頁も費している

ゲーベルII疑い得ないどうでもよいことを、二、三対比させ満足している

まさに当るを幸にい撫で斬りである。そして彼は、我、発見せりと言わんばかりに、自説を繰り広げている。それは主に詩句の数量化（221頁参照）による推論で、それほど迫力のあるものではない。

迫力と言えば、変な言い方だが、ビルシヨフスキー、ズイープスらのほうが余程迫力があると言えよう。つまり彼らには

絶対の信念がある。彼らにはゲーテの無謬性に対する絶対の信頼がある。ゲーテ作ことごとく傑作、レンツ作ことごとく駄作という堅忍不拔の信念である。そして、こうして同じ信念から出発しながら導き出した答が全く逆となるというのが、この論争の笑えぬファルスたる所以となっている。

一七七五年「イリス」誌七月号に、ある詩が発表されている。作者はゲーテをさす暗号Pでそれと示されている。ところが同誌九月号ではこの暗号Pがレンツをさす暗号Lに換えられている。この変更は何を意味するのか。当時は、他人の詩句、言い廻しの寸借、剽窃は頻繁に行われており、使われた方も、現在のように、やれ盗作だ、やれ著作権侵害だと目くじらをたてることはしなかったという。詩句、言い廻しとは社会の共有財産という意識があつたのだろうか。いずれにせよ、たとえ、他人から借りた詩句、言い廻しが並べられたとしても、作品全体がかもしだす風味は作者本人のものである。著者名を暗示する暗号の変更は何かの不手際によるものだろう。だとするとゲーテの詩風とレンツのそれとは、こうした不手際を起すほどに似通っていたことになる。なに、レンツが真似したに過ぎないさという向きもいるだろう。しかし、事の実偽はどうあれ、詩風が似通っているという事実は残る。ゲーテの作品が卓れているとすれば、それに似た作品をかくのも、なまかな才能でできるものではない。

一七七三年、「喜劇、プラトウスより、ドイツ劇のために」という本が匿名出版されている。これはレンツがプラトウスの喜劇を換骨奪胎し、ドイツ風に書き改めた五本の喜劇を収めたものだが、おおむね好評だったという。匿名で出版されたため、ゲーテの仕事だとみなしたのもかなりいたといわれている。これは当時、レンツがほぼ無名で、ゲーテがよく知られていたためだろう。

同じ頃、発表されたレントス最初のドラマ「家庭教師」について、クリスチャン・フリードリッヒ・シューバルトはこの作品は「我がドイツのシェークスピア、不滅のゲーテ博士による他の追隨を全く許さない作品」であると激賞している。他に

もこの世評高い作品をゲーテの作とみなした評家が多数いたということである。

言うなれば、ゲーテとレンツは十八世紀においては同列にみられていたということである。それが十九世紀になると二人の評価は天と地に開く。片や十九世紀を見ずして哀れな行き倒れ、片や天寿を完うし、静謐な古典主義を完成させたという伝記的事実が、二人の若き頃の作品評価に逆順となって決定的影響を与えたのだろうか。

ゲーテはレンツの死後、かつて彼と共に親しんだ逸楽と放恣の理念を昨日の世界に捨て、古典主義という金字塔を打ち建てた。その金字塔が、昨日の世界の、つまりシュトルム・ウント・ドラング期の作品をもまぶしく輝やかせ、金字塔自身と同じ色に染め上げてしまったのか。これは評家の下す評価の問題である。別にゲーテの責任ではない。十九世紀におけるドイツ文芸学の問題である。

まさに十九世紀とはゲーテの世紀である。一九〇二年、シュテファン・ゲオルゲは一つのアンロジーを編んだ。それはゲーテ以降の十二人の詩人の詩篇を編んだものだが、ゲオルゲ自身の詩は入集していない。そしてゲオルゲはこのアンロジーに「ゲーテの世紀」という表題をつける。つまりゲオルゲ自身が出現するまでのゲーテ以降の数々の詩人たちのめでたき業績をひとまとめにしておいて、それらの詩業はあくまでもゲーテの世紀のものであると言いつつわけである。ゲーテよ、師ゲオルゲの出現までをゲーテエピゴーン時代とみなすグンドルフはだからこそ、レンツなどには歯牙にもかけない。だからこそ、「詩と真実」第十四章にあるレンツ評伝は史上に遺る不朽の名弔辞、レンツもって冥すべし、これに抗しレンツを救おなどと夢思うなかれという言葉も飛び出して来る。

いずれにせよ、十九世紀において、ドイツ文学の評家の中で、ゲーテを頂点に載く文学ヒエラルキーが確立されたようである。そして、その過程で、レンツはあっさり抹殺されていった。別に私はこれに抗してレンツを救おうというのではない。別に一冊の文学史に頁を大きく割いて扱われているかどうかは問題ではない。偶々、目にしたこの「作者は誰か」論争

で、不図レモンツが衰れに思えたただけである。論手たちの論証なりに少し腹を立てただけである。本稿を起した理由である。

引用文献及び参考文献

- ゲーテ全集(潮出版)第十卷(河原忠彦、山崎章甫訳)。本稿中、「詩と真実」よりの引用は全て、河原訳を借用。
- Goethe, J. W. : Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bde. H. H. Beck
- Lenz, J. M. R. : Werke und Schriften. 2 Bde. Hg. von Britta Titel und Helmut Haug. Stuttgart, 1966—1977.
- Rosanow, M. N. : Lenz, der Dichter der Sturm- und Drangperiode. 1901. in russischer Sprache. Deutsch von C. von Gitzchow. Leipzig 1909.
- Forritzhelm, J. : Lenz, Goethe und Cleophe Fibich von Strabburg. Ein urkundliche Kommentar zu Goethes Dichtung und Wahrheit. Strabburg 1888.
- Falck, P. Th. : Der Dichter J. M. R. Lenz in Livland. Winterthur 1878.
- Falck, P. Th. : Friederike Brion von Sesenheim. Berlin 1884.
- Stöber, A. : Der Dichter Lenz und Friederike von Sesenheim. Basel 1842.
- Hohoff, C. : J. M. R. Lenz. Hamburg 1977.
- Stephan, I./ Winter, H. : Ein vorübergehendes Meteor? J. M. R. Lenz und Seine Rezeption in Deutschland. Stuttgart 1984.
- Inbar, E. M. : Goethes Lenz-Porträt. In : Wirkendes Wort Heftnummer den 28. Jahrgangs
- Dünzer, H. : Friederike von Sesenheim im Lichte der Wahrheit. Stuttgart 1893.
- Dünzer, H. : Grenzboten. Berlin 1892.
- Schmidt, E. : Charakteristiken. Berlin 1886.
- Goethe, J. W. : Dichtung und Wahrheit. Mit Einleitung und Anmerkungen von von Loeper. In : Hempels Ausgabe Bd. 22, Berlin
- Lenz, J. M. R. : Gedichte von J. M. R. Lenz. Hrsg. v. K. Weinhold Berlin 1891.
- Weißensels, R. : Goethe in Sturm und Drang. Halle 1894.
- Siebs : Die Sesenheimer Lieder von Goethe und Lenz. In : Preussische Jahrbücher Juni 1897.

- Bielschowsky, A.: Über Echtheit und Chronologie der Sesenheimer Lieder. In: Goethe-Jahrbuch 12. Bd. Frankfurt 1891.
- Goebel, J.: The Authenticity of Goethe's Sesenheim Songs. In: Modern Philology Vol. 1 1903—1904 Chicago
- Schröder E.: Die Sesenheimer Gedichte von Goethe und Lenz. In: Nachrichten von der Königl. Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen. Göttingen 1905.
- Annonym: Briefe aus Elsaß und Lothringen Erster Brief. In: Blätter für literarische Unterhaltung. Donnerstag, Nr. 5—5. Januar 1837.
- Gundolf, F.: Shakespeare und der deutsche Geist. Godesberg 1947.
- Anwald, O.: Beiträge zum Studium der Gedichte von J. M. R. Lenz. München
- Dorer-Egloff: J. M. R. Lenz und seine Schriften. Baden 1857.

Wer ist Autor, Goethe oder Lenz?

Yoshio Kikuchi

1835 machte Heinrich Kruse, der damals 19 jähriger Student war, die Pilgerfahrt nach den heiligen Orten. In diesem Fall bedeuten die heiligen Orte die, der "große" Goethe seine Spuren hinterlassen hat. Kurse besuchte Fräulein Sophie Brion, die jüngste Schwester von Friederike Brion, in Niederbronn in Elsaß. Bei ihr hat er 11 Lieder nach der in ihrem Besitz befindlichen Manuskripten niedergeschrieben. Alle diese Lieder wurden Goethe zugeschrieben und sind ausnahmslos in "Der junge Goethe" aufgenommen. Das sind die sogenannten "Sesenheimer Lieder". Und die Reihenfolge in "Der junge Goethe" ist folgendes: Nr. 1: Erwache Friederike; Nr. 2: Jetzt fühlt der Engel, was ich fühle; Nr. 3: Nun sitzt der Ritter an dem Ort; Nr. 4: Ach bist du fort?; Nr. 5: Wo bist du itzt, mein unvergessliches Mädchen?; Nr. 6: Ich komme bald, ihr goldenen Kinder; Nr. 7: Kleine Blumen, kleine Blätter; Nr. 8: Balde seh' ich Rickgen wieder; Nr. 9: Ein grauer trüber Morgen; Nr. 10: Es schlug mein Herz; Nr. 11: Dem Himmel wachst' entgegen der Baum, der Erde Stolz.

Das Lied Nr. 11 wurde von Kruse nach der mündlichen Mitteilung Sophie Brions niedergeschrieben. Von diesen Liedern wurden nur zwei (Nr. 7 und Nr. 10) von Goethe selbst in die Sammlung seiner Werke aufgenommen. Aber über die Autorschaft der restlichen 9 Lieder entstand der berühmte Streit unter den Fachleuten: Wer ist Autor, Goethe oder Lenz?

Ich will diesen Streit behandeln, aber ich habe keine Absicht, über sein Ergebniss zu urteilen, um mir "der Wahrheit" zu

versichern. Ich möchte nur die Argumentesweise aller Fachleute, die an diesem Streit teilgenommen haben, kritisch betrachten.

Nun gibt es fast keine äußeren Kriterien für die Echtheit der meisten Lieder, also kann man sich dadurch über die Autorschaft nicht entscheiden. So versuchten alle Fachleute "die inneren Beweise" zu finden.

Aber wenigstens nur über eines stimmen alle Fachleute überein: über die absolute Fehlerlosigkeit von Goethe. Nach ihnen verfasste Goethe nur die Meisterwerke und kein Mißbratenes. "Als ob alle Gedichte Goethes ohne Ausnahme vorzüglich sein müßten und niemandem außer ihm vollkommene Gedichte gelingen könnten" (M. N. Rosanow). Das ist der Ausgangspunkt von ihren Argumenten. Daher entstand das folgend Komische. Einer von ihnen, Bielschowsky hält das Lied Nr. 1 für außerordentlich minderwertig und schreibt es deshalb Lenz zu. Andererseits hält der andere Fachmann, Siebs das Lied für sehr gut und schreibt es deshalb Goethe zu.

Dieses Seltsame, Komische stammt meines Erachtens von der Hierarchie, die die meisten Germanisten, vor allem die des 19. Jahrhunderts aufbauten und auf deren Höhepunkt Goethe gestellt wurde. In einem Sinn ist das ja der reinste Mord Lenzens! Daher ist dieser Streit eine "ernste" Farce geworden. Diese "ernste" Farce zu sehen ist nicht sinnlos. Das ist der Grund, daß ich den vorliegenden Aufsatz verfasste.